

会長退任のご挨拶

日本微生物資源学会前会長
鈴木健一郎



2013年の大会をもって私は当学会の会長を任期満了により退任いたしました。会員の皆様の学会活動に対するご理解、ご協力のおかげで無事に任期の4年間を全うできましたことを厚く御礼申し上げます。

あつという間の4年間でしたが、いろいろなことがありました。最も大きな出来事は何といっても2011年3月の東日本大震災でしょう。被災された会員の皆様には改めてお見舞い申し上げます。この災害では、保存中、研究中、あるいは産業に利用されている多くの貴重な生物資源が失われ、設備が被害を受けました。しかし、失われたと思われていた貴重な種菌が復元できたというニュースもありました。当学会ではありがたいことに財団法人発酵研究所様から、被災された機関会員を対象に復興のための支援のオファーをいただき、公募の結果石巻専修大学のコレクションにそれを活用していただくことになりました。また、震災は生物資源の保存体制について再考の機会となりました。文部科学省が国立遺伝学研究所に委託して運営している生物遺伝資源委員会では、被害の状況、その後の対策、バックアップ体制の在り方について意見交換がなされました。大学共同利用機関法人自然科学研究機構では岡崎の基礎生物学研究所に生物遺伝資源のバックアップ拠点IBBPセンターを建設し、全国規模で生物資源の滅失による研究の途絶を防ぐ体制が整備されました。各機関でもインフラの補強、地理的分散による滅失防止などが講じられたことと思います。

2010年には生物多様性条約の第10回締約国会議、COP10が名古屋市で開催され、全国的に生物の多様性、生物資源の保全などが注目され、特に徹夜の調整の結果採択された名古屋議定書は、生物資源の取得と利益配分（ABS, access and benefit-sharing）に関する国際関係の議論を大きく進め、日本でもその批准に向けて国内措置の策定のための検討が進められています。この結果はカルチャーコレクションの活動に大きな影響を与えるため、学会としても注視していく必要があります。

2011年には札幌で世界微生物学会議（IUMS2011 Sapporo）が開催され、JSCCでは同会議において年次大会を開催し、総会、ワークショップそして2つのシンポジウムを行いました。日本の22の微生物関連学会が会員となって設立された日本微生物学連盟がIUMS2011のホストとなり、幅広い微生物学分野で同会議を受け入れることに成功しました。その後の連盟は継続した活動として微生物学全体の共通する問題の取り組み、微生物学の面白さ、重要性の社会への普及のための市民講座の開催などを推進するとともに、学会同士の合同企画、大会の合同開催の支援などが検討されています。連盟の中でもJSCCは最も小さい学会のひとつですが他の学会と共通する話題も多く、連盟の活動に積極的に参加することでプレゼンスを高めることができると考えています。

微生物資源の研究や産業利用を取り巻く環境は日々変化しており、規制などは厳しくなっているといえます。特に国際共同研究や海外微生物資源の利用においては他国の動向にも注意しなければなりません。カルチャーコレクションが微生物学研究的の基盤となり、利用促進の要素となるため、JSCCの役割はますます重要となってくるでしょう。

今後は一会員として皆様とともにJSCCの発展のお手伝いをさせていただきたいと考えております。こ

れからも江崎孝行新会長のもと，ますますの学会へのご支援をよろしくお願い申し上げます。

2013年12月

(独立行政法人製品評価技術基盤機構バイオテクノロジーセンター)